一つの疑問と一つの提案

太田茂行

〈疑問〉

幼児の教育に携わるものの一人として、大きな疑問に思うことがある。それは子どもたちが一日中自由に遊んでいられる幼稚園が、なぜこんなに少ないのだろうか、ということである。これは、いわゆる一斉保育（または課題保育）か自由保育かという面倒くさい、「えっらそーな」問題意識からくる疑問ではなく、子どもたちが熱中して遊んでいる姿を見ていて自然に湧いてくる素朴な疑問なのである。

道路でも、電車の中でも、公園でも、団地の階段でも、まったくいたる所で遊んでいる子どもの姿を見る。一心不乱に喜々として遊んでいる子どもたちを見るにつけ、「子どもっていうのは本当によく遊ぶものだな。」「遊ぶというのは子どもの生命そのものじゃないかな。」と思ってしまうのである。これはもう、私の実感なので如何ともしがたい。別の言い方をすると遊びは子どもの生活の糧であるとなろうか。

遊びが子どもたちの生活を豊かにし、肥やし、大きく発展させてやるには、（これはすなわち子どもの成長発達を保障する、援助する、ということだが）子どもたちの遊びを大切にするということが王道だと、どうしても思うのである。

幼稚園というものが、子どもたち一人々々にとって最も魅力ある遊び場に徹し切らないのは全く不思議なことである。大ていの幼稚園には、こまごまとしたそれこそ幼稚なルールがある。朝、登園すると会社のタイムレコーダの原型のようなシール貼り。みんなで体操。天気がよくて跳びはねたいような日和でも、お集まり。降園時間でもないのにお片付け。折り紙したり、お遊戯したり、お話を聞いたり、駈けっこしたり、一見楽しい遊びふうのことも盛り沢山。けれども、それらは先生によって「みんながやらなきゃいけないこと」「みんながやるべきこと」として前もって企まれたことで、時間決めの定食といったようなものが殆んどのようである。

それでも、大ていの子どもたちは「ようちえんはたのしいよ」と言うのである。何とけなげで哀れな話だと思うのである。こちらの頭には、幼稚園以外のところで、キラキラとまた激しく自分の遊びに取組む子どもの姿の方がしっかりと焼付いているから、「ようちえんはたのしいよ」という子ども

の目を思わず覗きこんでしまうのである。

〈提案〉

自由と放縦はちがうとか、先生の教育的関わり云々とか、心理的食わず嫌いを助長してはいけないとか、小学校入学までに最低の知識云々とか、文部省の六領域がどうのこうのといった観念的で徹頭徹尾おとな側の論理や理くつを一度あっさり捨ててみてはどうだろうか。そうして、最低一か月、できれば一学期間位は幼稚園を子どもの最高の遊び場として解放してみてはどうだろうか。時間決め定食といったカリキュラムは一切取下げて、遊びの材料となるものは用意するが、その調理方法と食べ方は一切子どもたち一人々々に委ねる。先生方は、どの子どもも楽しく充実した生活を送ることだけを念頭におく。そのことだけを念頭において、それぞれの子どもが自らくり広げる遊びを見守り、また仲間入りする。

こういった試みを先ず行なってから、先述の大人側の論理、問題提起について先生どうし、あるいは保護者も含めて話し合ってみても決して遅くはあるまいと思う。幼稚園は義務教育ではない。だから小学校教育における指導要領のように先生や学校の方針、試みを外的に規制するものはない。あるとすれば、それは未経験なことに直面するという先生方の不安（それはふつう教育観により武装される）ではないだろうか。一日中子どもたちを遊ばせておいたら収拾がつかなくなるのではないか、その場で自分が具体的にどのように動いたらいいのだろうか、保護者からの信用を失ってしまうのではないか、と不安が生じてくるだろう。

しかし子どもにしてみれば、遊びに徹するということは未経験であるどころか、暇さえあれば子どもたちは遊びに徹せん、としているのである。そういう姿が道端や公園でくり広げられている。確かに百人から二百人の子どもたちが一斉に遊びだしたら、ケンカやケガも増えるし、先生の気付かぬことも数多く起るだろう。しかしそれを「収拾がつかない」と把えるのは正しいだろうか。もっと子どもの活動に信頼をおくことはできないだろうか。何よりも子どもたちは遊びのプロなのだから。

また、その場で自分が具体的にどう動いたらいいのか想像もつかない、という不安に関しては、次のように言えないだろうか。すなわち、どうしたらよいのかわからなければ、子どもがそれを教えてくれる。ということである。

一日中遊んでいられるとなれば、子どもたちは即座に色々なことに取組むだろう。そうして先生にも実に様々な働きかけや誘いかけ、要求をしてくる。先生に対して、子どもの方から「こうして欲しい」と語りかけてくるのである。それは画用紙がほしいという簡単な要求であったり、今の自分の悲しい気持を分ってほしい、支えてほしいという声にもならないまなざしによるむずかしい訴えであったりするだろう。そ

の一つ一つに丹念に応じていくこと、それが先生の動きかたになるわけである。これは時間決め定食といえるカリキュラムを通じて、専ら先生が子どもたちに働きかけ、要求を出している保育形態での先生の動きと全く異質なものとなる。従って、子どもと先生の間でもたれる経験も全く異質なものとなり、お互いにそれまで気付かなかった面に触れることができるようになるだろう。先生の側からみれば、子ども観が変わるということも起こり得よう。

三番目の不安、すなわち一日中子どもを遊ばせておくような幼稚園は保護者の信用を失うのではないか、という不安は最も強いものかもしれない。しかし、子どものよりよい生活、よりよい発達成長を願いその実現に努力する、ということが親と先生の共通の目標として確認されるなら、この不安も越えられない程のものとはならないのではないだろうか。

第一に、現在の多くの幼稚園で行なわれている時間決め定食型の保育形態が、絶対的に正しいとされる根拠は実はどこにもなく、一日中子どもたちが伸び伸びと遊んでいる幼稚園も少数ながら存在しているのである。また、諸外国の幼児教育の紹介も様々な保育型態のあることを教えている。

第二に、一日中子どもたちが遊ぶ場所として幼稚園を解放する、といっても保育時間には変更を加えないのだし、当初はせいぜい一か月から一学期間程度の短期の試みとしてなのである。保護者との十分な話し合いは、この試みを終えた後で初めて実りある具体的な（すなわち、観念的、教育論的なものでなく、この試みを経験した子どもの変化に中心をすえた）ものとなるだろう。

最初はこの試みに反対していた人が、終わりには支持者になるかもしれないし、子どもの教育に絶対的な自信をもっていた人がその自信を失うかもしれない。またその反対のことも起り得よう。これは親にも先生にも起り得ることだろう。しかし、子どもはより生き生きとなり、輝きをました目をもつことになる。より子どもらしい子どもとして、ぐんと力強さをますことになろう。「ようちえんってほんとうにすてきだ」と身体中で表現するだろう。このことを私は断言できる。おとなたちは子どもたちのよりよい成長発達という願いを持ち続けていればこの試みを通しての自分の考えの混乱や、それまでの経験との落差を、ただこの子どもたちの変化という一点から捉え直す必要を感じるだろう。

以上、ささやかな文章ですが現在の「普通の」幼稚園に対する私の大きな疑問と一つの提案を記してみました。たった一つの園でも一か月または一学期間の「冒険」をする勇気をもって頂ければこれ以上嬉しいことはありません。

（愛育養護学校）